

令和5年度 第6回「部活の未来を考える会」会議録

会議名	令和5年度 第6回「北九州市部活の未来を考える会」
会議種別	市政運営上の会合
日時	令和5年12月15日(金) 15時30分～17時00分
開催場所	小倉北区役所東棟8階812会議室(北九州市小倉北区大手町1番1号)
出席者	<p>[構成員] ※ 50音順敬称略 岩谷 かおり、上村 英樹、倉本 京子、古閑 明子、下田 功 新谷 麻美、園田 美恵子、園山 浩、高田 俊也、花田 佳子 松井 清記、森川 正和、和田 正人</p> <p>[事務局] 教育長、教育次長、学校教育部長、特別支援教育担当部長ほか5名</p>
次第	<p>1 教育委員会あいさつ</p> <p>2 議事 (1) 事務局による意見の取りまとめ確認</p> <p>3 諸連絡</p>
会議経過 (発言内容)	<p>1 教育委員会あいさつ</p> <p>【教育長】 北九州市部活の未来を考える会であるが、今年5月に立ち上げ、本日が第6回目、今年度最後の会である。 第1回目の時にも申し上げた通り、社会状況が変化しており、少子化が進む中で、社会のニーズが多様化している。部活動の姿も現状のままでは、変化に対応できなくなる時代である。さらに、教員を取り巻く様々な課題が噴出しており、教員の働き方改革について真剣に検討しないといけない時代に入っている。このような課題を踏まえながら議論を行い、皆様から意見を伺ってきたところである。 本日は、これまで行っていただいた議論を「中間のまとめ」という形で、教育委員会事務局がまとめさせていただいた。資料をもとに、取りまとめをお示しすることになる。その取りまとめに関しても、忌憚のないご意見を伺いたいと思う。また、これから先の予定であるが、来年度はさらに具体的な課題を掘り下げ、計画に練り上げていく予定である。これからも様々なご助言をいただきたい。 最後に、これまで建設的なご意見をいただき、改めて皆様のご尽力にお礼を申し上げ、私からの挨拶とさせていただきます。</p> <p>○ 会議資料確認</p> <p>2 議事</p> <p>○ 公開非公開</p> <p>【座長】 原則通り公開ということでよろしいか。 (承認)</p>

(1) 事務局による意見の取りまとめ確認

【事務局】

資料1をご覧いただきたい。

まず、1「はじめに」である。生徒がスポーツ・文化芸術活動に親しむ機会を将来にわたって確保することを目的とし、学校部活動から地域クラブ活動への移行に向けて、これまで5回の会議を開催してきた。本取りまとめは、現時点における、「北九州市部活の未来を考える会」の意見をまとめたものである。

続いて、2「現状と課題」である。学校部活動は、スポーツ・文化芸術に興味・関心のある同好の生徒が、自主的・自発的に参加し、各部活動の責任者の指導の下、学校教育の一環として行われ、自己肯定感、責任感、連帯感の涵養に資するなど、学校という環境における生徒の自主的で多様な学びの場として、教育的意義を有してきた。しかし、本市においても、少子化が進行する中、単一校では部活動の運営が困難な状況や、指導者の確保が困難な状況も生じている。そして、教員の働き方改革の視点からみても、教員の勤務時間は長時間化しており、教員を対象に実施したアンケート調査では、6割以上の教員が「報酬が支払われても指導したくない」との結果が出ている。以上のことから、学校部活動は、今後、ますます活動が困難な状況となる可能性がある。

続いて、3「北九州市における部活動の望ましい姿」である。これは、「北九州市部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」に記されており、「より多くの生徒が入ることのできるもの」、「指導者が余裕と意欲をもって指導できるもの」である。今後の方向性を示すうえで、これらの観点が基盤となるため、「望ましい姿」として記した。

続いて、4「改革の方向性」である。1つ目は、(1)拠点校型（エリア型）部活動の導入である。北九州市立中学校の部活動数及び規模の適正化を目的に、拠点校型（エリア型）部活動の導入である。具体的には、「複数校で部活動を運営する等、拠点校型（エリア型）部活動に整備すること」、「拠点校型（エリア型）部活動に整備しつつ、地域移行・地域連携を模索すること」、「令和6年度にモデルとして実証を行い、3年を目途に全市へ拡充すること」である。

2つ目は、(2)休日の学校部活動の地域クラブ等へ移行である。休日の部活動を段階的に地域クラブ等へ移行する。具体的には、「地域移行については、まずは休日から開始すること」、「3年を目途に段階的に地域の活動へと移行すること」、「最終的には、学校部活動から地域クラブ活動等に移行すること」である。

3つ目は、(3)各種制度を整備である。「人材バンク」、「地域クラブ登録制度」等の制度設計を行うとともに、現行の制度についても再整備する。

①指導者登録制度の整備について、具体的には、「登録型「人材バンク」を整備すること」、「学校部活動や地域クラブ活動等に対応すること」、「指導者の量を確保するとともに、質も担保すること」である。

②団体登録制度の整備について、具体的には、「「地域クラブ活動」に該当する団体の登録制度を整備すること」、「受け皿となる団体を確保するとともに、質も担保すること」である。

③その他制度の整備について、具体的には、「「地域クラブ活動」による学校施設利用のあり方を検討すること」、「北九州市部活動の在り方に関する総

合的なガイドライン」の見直しをすること」である。

最後に、5「今後について」である。以上のことをもとに、今後、北九州市の部活動地域移行推進計画（仮）を策定する予定である。そのため、令和6年度も、引き続き「北九州市部活の未来を考える会」を開催し、意見をお聞きしたいと考える。また、部活動地域移行については、各モデル実践やパブリックコメント等を実施し、適宜、修正を加えながら検討していく予定である。

資料2をご覧いただきたい。各事業のスケジュールである。「北九州市部活の未来を考える会」の意見をもとに、スケジュールにした。平日については、拠点校型を導入し、令和9年度には完全実施を目指したいと考える。また、休日については、段階的に休養日を拡大していき、令和9年度には休日部活動の完全地域移行を目指す。その結果、部活動は完全平日化、休日は学校ではなく、地域クラブ等が実施主体となる予定である。その他、先程お話ししたように、次年度も「部活の未来を考える会」を開催し、推進計画の策定等を行う予定である。

【委員】

モデルとして実証を行うのであれば、多くの課題が出た方がいいと考える。そして、課題を検証するためには、様々なエリアでモデル実施を行う必要があると思う。その場合、学校が近いことや小規模校と大規模校のマッチングなど、条件がすぐにそろう場合は令和6年の4月から可能だと考える。しかし、エリアによっては準備に時間がかかることや、複数校が1つのチームとなることで、これまで頑張ってきた3年生が最後の夏の大会に出場できないということも想定される。生徒・保護者の思いを考えると、夏以降に実施するモデルの設定も必要ではないかと考える。4月から実施のエリア、夏の大会が終わって3年生が引退した後の実施のエリア、2つの設定が必要ではないかと考える。

【委員】

今年度のモデル実施の反省点も踏まえ、次年度以降の内容の検証も当然行わないといけない。そして、拠点校型のメリット、デメリットという部分も当然現れる。それから、もうすでに大人数で活動している学校は拠点校には難しい。各地域の実情に合わせた形で、柔軟に実施していこうということで、3年間の移行期間を設けてはどうかと考える。

また、少子化という問題にも向き合う必要があるため、拠点校型の導入は、活動の推進という意味合いが大きい。拠点校という形で、子どもたちの活動を保障していこうということであるため、部活動を完全になくす方向で考えているわけではない。保護者を含めて説明していく必要があると考える。

【委員】

北九州市のモデル事業で、運動部活動の指導者の派遣等を行ってきた。その中で、契約の問題、予算の問題等で、春先にモデル事業が一旦終了してしまい、再度始まるのは7月となって、全く継続性がなくなる。3年生の子どもたちにとって伸びるであろう4～7月までの間、指導者の派遣が途切れてしまう。子どもや保護者からは、継続した指導を望む声が上がっていた。指導者も指導に行きたいけれども、保険等の裏付けのない中で指導することは

できない。子どものことを考えると、切れ目なく、同じ指導者に指導してもらえることが、ベストな方法と思う。モデル事業を今後実施するにあたっては、考慮していただきたい。

【委員】

先生方が人材バンクに登録する場合、副業規定等が関係してくると思うが、兼職兼業の現状についてお聞きしたい。

【事務局】

兼職兼業について、現在も一定の範囲内で認められている。例えば、スポーツの審判や大学での講演、専門書の執筆などが上げられる。兼職兼業の許可をする際に考慮しなければならないのは、先生の心身の健康を確保することである。

【事務局】

学校の労働時間と地域団体での労働時間を通算した時間から法定労働時間を差し引いた時間が、単月100時間未満、或いは複数月平均80時間以内とならなければ、兼職兼業の許可は出せない。今後、教員が地域団体での指導に従事できるような環境を整備したいと考えている。

【委員】

実際、兼職兼業の制度を使って部活動指導が行われている県はまだないと聞いている。令和3年の始めに、国自体は緩やかに実施していいと提案されているが、現実には、受け皿がないということである。当然、先生方は、登録よりは個人の意思でやる方が早いと感じている。兼職兼業の制度をどのような形で使っていくかも、モデル実施の中の課題として出てくるのではないか。

【委員】

先生方や有志の方が、クラブチーム等を立ち上げた場合、中学校の体育館等を貸してもらえるのか。今後、部活動が地域クラブ等へ移行となれば、むしろ推奨すべきことではないかと思う。

【委員】

可能と思うが、中学校によっては、土日の体育館開放をしている。制度設計とともに、既に利用している団体との調整が必要であると考え。体育館やグラウンドは、すでに開放されているが、文化部で使用する音楽室等については、道具の保管や建屋への入り方等、条件を整備する必要があると考え。

【委員】

少年少女の合唱団はいくつかあり、市内の小学校の先生が指導しているケースもある。教育委員会とうまく連携できれば学校が使用できる可能性があるのではないか。

【委員】

校長会を含め、説明の場は必要になる。

【委員】

兼職兼業や学校施設利用の運用にあたっては、大きな課題である。また、学校の働き方改革を踏まえた部活動改革でもあるため、次年度の会議には、事務局として、教職員課、施設課に入ってもらえるとありがたい。もちろん各課が連携して検討しているとは思いますが、議論のところから聞いていただきたいと思う。

【委員】

小学校の体育館や運動場について、土日は、自治総連、まちづくり協議会の管理になるため、自治総連にも話を通してほしい。教育委員会事務局から、学校通じてでもよいので、土日に地域クラブが使用するという話をしてほしい。

【委員】

施設の問題では、学校施設以外の市や県の施設に関しても、おそらく部活動地域移行に伴い、使用の仕方についての議論が必要だと思う。文化部になれば、学校の代わりとなるような施設も含めて使用できるのかということも検討しないといけない。運動にしても文化にしても、学校施設の利用に関しては課題が出てくるため、整理が必要である。

【委員】

北九州市では、令和4年度から、連携部活動の制度を導入している。これは、他都市に先駆けて実施しているものであり、いわゆる拠点校型部活動の制度とほぼ同じである。令和6年度からのモデル事業には、現在の連携部活動の受け入れ校をモデル校に含んではどうか。これらの学校は、他校の生徒を受け入れながら部活動を運営するというノウハウをもっており、中体連の大会にも参加しているため、モデルとなりやすいのではないかと。

本校の地域に、地域移行を進める上で受け皿になりたいという意思を持った個人がクラブチームを立ち上げ、複数の中学校から中学生を集めて指導している。このチームは、中体連の登録をしていない。あえてそれを謳った上で、学校に部活動がないのなら一緒に練習しようという触れ込みで、クラブを立ち上げている。本校の施設を使い、毎週1日練習しているが、これも一つの形かなと思っている。指導者は、地域の方であり、教員ではない。

また、教員がやっている陸上競技クラブがある。平日は一切活動せず、土日のどちらだけ登録している子どもたちを集め、市内で陸上を教えている顧問の先生方が指導している。月に1度か2度ぐらいだが、専門家に指導してもらえるという喜びがある。これも一つの形と思っている。

【委員】

文化系の先生と話をした際に、合唱が盛んな学校や吹奏楽が盛んな学校があるため、モデル地域を区の枠で考えるのは難しいという意見をいただいた。

【委員】

合唱は、体が楽器であるため、どこでもできると思う。そのため、区を越えて活動しやすいのではないかと思う。

【委員】

吹奏楽では、拠点校の教員が関わっていないと難しいのではないか。建屋内にどう入るのか、学校のスケジュールとの調整等もあるため、どのような形が一番いいのか悩ましい。

全日本の吹奏楽連盟としては、来年度から、複数の学校で編成された団体がコンクールにエントリーできる予定である。しかし、二重登録ができないという問題がある。各学校の上手な生徒のみが集まった地域クラブを作り、コンクールに出てくるというのは本末転倒だという考えからである。その兼ね合いと、北九州市が考えている拠点校や休日の地域クラブへの移行が、どうやったら噛み合うのかというのが見えないのが現状である。

【委員】

昔は、上手な生徒をたくさん集めてチームをつくるというイメージがあったが、今はその限りではない。子どもたちのニーズに合わせて、やりたい子どもに門戸を開くという考えである。

【委員】

連盟の考え方も同様である。そこは徹底していくしかない。

物理的な部分では、道具の管理やメンテナンスを含めると、大きな楽器は動かせない。持ち回りでできるのかと言われたらそれは本当に難しい問題になる。そのため、モデル等でやらざるをえないと思う。

【委員】

モデル等で実施をしてみないと課題も見えない。連携部活動以外の方法を模索するとなると課題があり、難しい。

【委員】

その他の文化部活動について、伝統芸能や美術、絵画等は、土日のみ参加したい生徒を集め、指導してもらうという形は可能だと思う。

【委員】

地域マンガクラブで活動している生徒がいるが、楽しいと言っている。会場まで少し距離があったとしても、休日に自分のやりたいことができる満足している。

施設に関しては、吹奏楽でも、楽器の保管場所さえ解決できれば、運動と同様に体育館での練習も可能である。校舎の中に入らなくても活動ができるため、地域移行の一つの方法として考えられるのではないだろうか。

【委員】

学校施設は、小中が連携してもいいと考える。

【委員】

学校施設利用に関しては、様々なルール決めや地域の方との兼ね合い等、調整が必要かと思う。

【委員】

以前、部活動のガイドラインを作成する際に、子どもたちの発育発達に関して、練習が過度にならないよう配慮しなければならないという前提があった。しかし、モデルではあるが、学校の部活動と地域クラブの両方で活動している生徒がおり、自分の中でジレンマを感じている。部活動もモデル事業も両方とも教育委員会が絡んでおり、私の心の中にずっと引っかかっている。

また、今年で5年目になるが、中学校でユル部活を実施している。週2回、体を動かそうという目的で実施しており、1・2年生だけで20数人の登録がある。体を動かしてみたいという子どもが、潜在的にいるということを感じている。今の時代、子どもたちは、塾や習い事等で忙しく、そのニーズに応えるのも、私たち大人の責任なのではないかと考える。

【委員】

スポーツ協会にも、スポーツ少年団にも中体連にも属さないクラブを、自分たちで立ち上げたいという相談があった。スポーツ協会が、よし悪しを言えるような立場ではないため、場所等の折り合いをつけて実施するのがいいのではないかと話をしたところである。

しかし、営利目的であれば体育館は使用できない等、様々な問題が出てくる。特に、部活動やNPO、クラブチーム等、たくさんの団体が出てきた時に、学校施設だけでは足りないと考える。また、行政区の施設を使用するとなれば、一般利用や大会等との兼ね合もあり、なかなか使用できない。

部活動にはない競技は、すでに未来の姿になっている。練習量等は関係なく、どんどんやっている。このようなことを調整するのが課題になると思う。

【委員】

少子化になり、子どもが減っている。しかし、学校の数は大幅には変わっていない。極端に言うと、学校数を減らし、指導したくない先生は授業のみ、指導したい先生は部活動指導だけのようなのはできないのかと思った。

【委員】

おそらく働き方の改革にはなると思うが、そういう形ではできない。部活動は、子どもたちの違った側面を見るものであり、教育的な活動ということが主だった。しかし、少子化や教育的な意味合いも含めて、子どもたちニーズに応えるという状態が、おそらく瀬戸際に来ている。そのため、果たして本当に実現可能かということモデルで実証しようということ。そういう意味では、地域部活動や合同部活動は子どものことを考えており、連携部活動や休日の休みというのは先生のことを考えているものである。

おそらく、様々なモデルを実施しても、全てを満足させることは現時点で難しいため、今後どういう形でそれが具体化されていくかが大切である。課題は当然出てくるため、一つ一つ前向きに進んでいくしかないと思う。

【委員】

形として整ってきたため、令和6年に向かって進んでいくしかないと思う。拠点校型については、区をまたぐ拠点がでてきたり、各地域で環境が違ったりすると思う。そのため、しっかりとガイドラインを作る必要がある。また、大幅に多様性を認めないと実践できないだろうと考える。とにかく走ってみることで、いろんな課題が出て、それを一つ一つ解決する必要があるだろうなと思う。

【委員】

進んでいるので、これがさらに良くなるように、徐々にやってもらったらいいいとしか言えない。

【委員】

おそらく、皆さん同じ考えで、子どもたちのことを考えてほしいということ。当然ながら、これからどのように取り組むのが良いのかと考えていると思う。今後も皆さん協力が必要である。

【委員】

拠点校型部活動について、部員数が変わると、エリアの組み方が変わるのか。変わるのを想定しているのであれば、力のある選手のいる学校と組む学校が出てきて、勝利至上主義につながりかねない。拠点校型にするのであれば、エリアを固定していただきたい。

エリア内に、専門の先生が全くいないとなると、現在と状況は変わらない。各エリアに応じた教員の配置を教育委員会にしていきたい。

地域クラブの立ち上げについて、熱心な代の保護者が立ち上げ、自身の子どもが引退したら全く関わらないとなると元も子もない。指導者がいなくなり、子どもだけ残ってもいけない。地域クラブの立ち上げについては、かなり慎重にしなければならない。線引きが必要である。

【委員】

合同部活動は、以前までは夏と新人大会で人数構成が変わるため、組み直しをしていた。夏まではAとBが合同だったが、新人からはCとAが合同にということのを、顧問同士が話し合い、勝利至上主義にならないように話し合っていた。

去年までは、新人大会で合同チームを組んでいたが、新しい年度が始まり、一年生が入ってきたら、合同チームを解消するしかないというルールであった。今年からは、新人で合同チームであったら、新入生がたくさん入部し、解消しないといけない人数になっても、そのまま組めるという形になった。

例えば、小倉北区の軟式野球部はすべて合同である。顧問同士が話し合いをしているため、子どもたちの仲は良く、どこと組んでもうまくできるように調整しているなど感心している。

余談であるが、今年その中の一つが全国大会まで出場した。合同チームで全国大会に出場し、大活躍して、小倉北区の先生方はすごく喜んでいて。

【委員】

拠点校型であるが、このイメージ図では、各拠点校があり、エリアごとに整理していくのかというふうに思っていたが、エリアは毎年変わるものなのか。

【事務局】

今から考えていくことであるが、基本的には固定で考えている。

【委員】

拠点校型に整備していく際、移動手段についても検証を行っていかないといけないと思う。移動手段の一つとして、自転車が考えられるが、北九州市の現状で考えると、自動車の交通量が多く、交通事故も増えていることから、制度の整備や安全面の確保を丁寧に行っていかないといけない。これは、子どもたちの命に関わることであり、ヘルメットの着用や安全な乗り方の指導、交通ルールの周知等が必要である。そのようなことを具体的に検証していきながら、整理をしていく必要があると思う。

また、駐輪場の整備等が必要であり、事故やトラブルがないようにしながら、起こった際の責任の所在等を整理して、慎重にしていきたいと考えている。

【委員】

様々な対応が考えられるため、モデル事業の中から、様々なアイデアを引き出していくしかないと思う。

【座長】

以上で、本日の議事を終了する。